

石橋先生と学術振興会116委員会

上野景平

日本学術振興会の委員会の一つに炭化水素化学第116委員会というものがあった。この委員会は昭和60年に改組され創造機能化学第116委員会となった。この委員会に3つの分科会があり、その一つに機能評価、分析の分野をカバーする第2分科会があり、主として有機分析関係の諸先生が委員になっておられる。昭和40年代この委員会の第2分科会の主査は故武内次夫教授であった。私も昭和47年頃先生の推薦でこの委員会に加えていただいた。学術振興会は戦前はかなり大きな基本財産もあったので、委員会には研究費まで出るほどであったが、戦後は独立会計になったので一年に2回くらいの委員会が主として東京で開催されていた。この委員会で発表される研究は主として機器分析の分野で、まだ萌芽的段階にあるものを委員会で発表し、委員の批判をおおごうというインフォーマルな会議であった。

私もこの委員会に出させていただいて、研究途中の未完成の研究が多数発表され有意義な委員会であると思った。学振では地方の委員には旅費を出さねばならないので、地方委員の追任はあまり歓迎されず、九州からは私一人だけであった。そこで、このような委員会こそ、アイデアの豊富な石橋先生を仲間に迎えるべきだと、武内先生はじめ委員会の幹部にお願いして委員になっていただいた。昭和50年代初頭の頃のことである。

以来、委員会のたびごとに石橋先生と一緒に出席するようになった。石橋先生は無欠席に近い精勤ぶりで委員会に出席され、予想にたがわず次々に新しいアイデアに芽生えた研究を発表されて来た。そしてそれらの芽生えの研究は数年後には立派な研究に発展し、学会で発表され大きな反響をひきおこした。

フローインジェクション分析法の分野でも各種緩衝液流れを利用したF I Aは容量分析をF I Aに取り込んだアイデアあふれる研究で中和滴定、Red-Ox滴定への応用など多数あるが、その萌芽は当委員会でたびたび紹介された。

私も委員を辞任して数年になるが、委員会の席では同じ九州大学工学部の石橋先生がこのような立派な研究を発表されるのを誇らしく思ったことである。石橋先生がもしご存命であれば、今日なお、委員会で新しいアイデアに基づく研究をつぎつぎに発表されているに違いない。